第2幕

バロック・ロココ

権力者たちの芸術

絶対君主と「国家」の誕生

衰退しゆくキリスト教社会に宗教改革による追撃が加わるなかで、それまでの社会に代わる新たな秩序が求められるようになりました。ヨーロッパには「国家（主権国家）」の分立する「国際社会（主権国家体制）」が形成され始めます。

中世の「キリスト教社会」というのは、全てが宗教に従属する社会です。もちろん政治も宗教に従属しています。こう言うと驚かれるかもしれませんが、その意味するところは、中世には我々の考えるような「国家」や「国際社会」はなかったということです。少し想像しにくいので、先の例え話で考えましょう。中世ヨーロッパは、いわばカトリックファンクラブの集団で、ファンクラブを運営する者たちが力をもっています。ファンクラブの会長が教皇で、幹部として有力な司教たちがいます。そして、ファンのなかで各地の有力なファンといった程度の存在として王や諸侯がいました。つまり、現在のように「イギリス」や「フランス」といった国家が分立し、国境で隔てられ、国家を国王が動かし国家のもとに国民がいる、という状況ではなかったのです。

しかし、「キリスト教社会（カトリックファンクラブ）」が衰えると、政治と宗教の関係は逆転し始めます。政治勢力が上位概念に地位を上げるのです。各地の王は絶対君主と呼ばれ、キリスト教の頂点に立つ教皇の影響を排除しながら、自立し始めます。そして地域を支配する主体となり（主権）、自己の権力のもとに貴族を従属させて統治に利用し、その権力の及ぶ領域（国境）を明確にしていくことで、「国家」という枠組みを形成していきました（図14）。これが、いわゆる絶対王政です（16～18世紀）。絶対君主の代表たるフランスのルイ14世は言いました。

「朕は国家なり」

こうして、ヨーロッパには、「キリスト教徒」が構成する「キリスト教社会」に代わって、「国家」が構成する「国際社会（主権国家体制）」が形成され始めます。なお、これは皆と同じ「キリスト教徒」の時代（普遍）から、他と違う「国家」が分立する時代（特殊）への転換とも言えるでしょう（**西洋絵画の見方1**）。

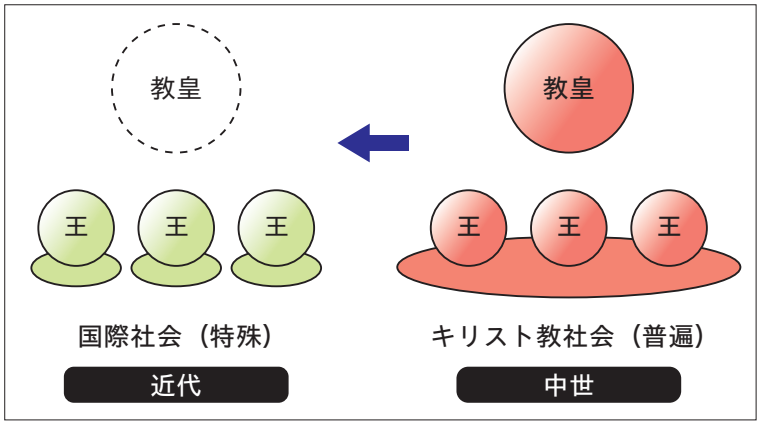

図14 ● 宗教と国家

国際社会と国際戦争・宗教戦争

我々の考える「国家」は特に主権国家と呼ばれるもので、成り立ちには条件が二つありました。一つは国家を動かす力としての主権が存在すること、もう一つは主権の及ぶ範囲としての国境が明確であることです。要するに主権国家とは、主体と領域が明確な、まとまりのある国家のことを言います。その初期段階では、絶対君主が絶対王政のもとで主権国家を形成しました。

ただし、この主権国家の初期段階（社団国家）では、まとまり具合において不十分だったと言えます。というのは、まだ身分制度が残っていたからです。国王は主権を握って人民を支配していましたが、人民は身分ごとに支配され、グループが束ねられることで国家としてまとまっていました。まとまりとしての「キメが粗い」のです。現在の我々が考える主権国家は、その発展段階（国民国家・民族国家）にあたります。そこでは、身分制度が解体され、自由で平等な個人が国家としてまとまっています。まとまりとしての「キメが細かい」のです。

ところで、新たに生まれた「国家（主権国家）」や「国際社会（主権国家体制）」には問題がありました。それは宗派争いによる宗教戦争、あるいは国境争いによる国際戦争が勃発してしまったということです。新教と旧教の対立は国内でも、そして国家と国家の間でも戦争が生じたのです。最も大きなものは、17世紀の神聖ローマ帝国（現在のドイツ）で、新教勢力と旧教勢力が相争った三十年戦争でしょう。この戦争では、新教と旧教をめぐる宗教内乱から、外国を巻き込む国際戦争へと発展します。絶対主義時代は、宗派争いと国境争いが入り交じる戦争の時代になってしまいました。

宣伝に利用されるバロック

さて、ヨーロッパの旧教勢力は、宗教改革での新教勢力の攻勢に対して、巻き返し運動を展開しました。対抗宗教改革です。カトリック勢力は、ヨーロッパ外での優位を目指し、海外伝道の強化に着手します。有名なイエズス会が設立され、大航海時代に切り開かれた航路を利用して海外伝道に乗り出していきます。日本にもフランシスコ・ザビエルがやってきてカトリックを伝えました。

一方、ヨーロッパ内では、教皇の権威の確認、宗教裁判の強化と禁書目録の制定などを推進して、旧教勢力の結束に努めました。旧教の代表は、国家で言えばスペインやフランスなどです。スペインの絶対君主であるフェリペ2世は言います。

「異端者に君臨するくらいなら、100度死ぬほうがましだ」

カトリック勢力の巻き返し運動では絵画が大いに利用されました。権力と結びつき、宣伝に利用されていったのがバロックです。これは一種のプロパガンダですから、カトリックの世界に引き込むために、人を惹きつける様々な技術が駆使されることになります。

聖書の場面を劇的に！

次の作品は、バロックの扉を開いた、イタリアのカラヴァッジョの作品『聖マタイの召命』です（図15）。

イエスは、マタイという人が収税所に座っているのを見て『私に従ってきなさい』と言われた。すると彼は立ち上がって、イエスに従った。（マタイ福音書9：9）

イエスがマタイを一言で弟子にしてしまうドラマチックな場面です。画面右側のイエスは画面左側に向けて右手を伸ばし、マタイに指を向け、それを強調するべく右奥からスポット

図15 ● カラヴァッジョ《聖マタイの召命》1599-1600年、カンヴァスに油彩、322cm×340cm、ローマ、サン・ルイジ・デイ・フランチェージ教会

ライトのようにマタイに光が向けられています。イエスの右手と差し込む光がマタイに向けられることで、劇的な演出に成功しています。諸説ありますが、当のマタイは一番左側の硬貨を見つめている男性と言われています。イエスに指をさされた次の瞬間、マタイは何かに憑かれたように立ち上がり、イエスに従うのでしょう。また、指をさしているイエス本人はかなりの美男に描かれています。見る者を惹きつけるべく、明暗を強調して劇的に、そしてイエスを魅力ある人物として描いているのです。

あるいは、スペイン領ネーデル

ラント（現在のベルギー）では、ルーベンスによる『キリスト昇架』（図16）と『キリスト降架』（図17）が描かれます。カラヴァッジョと同様に、やはり明暗を強調して磔刑の前後を劇的に表現しています。こうした明暗の強調による演出をテネブリズムと言います。

権力と結びつく

バロックは旧教勢力の権力と結びついたため、聖書の場面だけでなく、宮廷の王侯貴族を描くこともありました。

最も有名なのは、スペインのベラスケスの代表作『ラス・メニーナス（女官たち）』でしょう（図18）。ここには、スペインの絶対君主たるフェリペ5世の娘マルガリータを中心に、王侯貴族と召使いたちが描かれています。よく見ると、ほとんどの人々は我々に、つまりこの絵を見る私たちに視線を向けているのがわかります。そして、注目に値するのは娘マルガリータの左後方にある

図16 ● ルーベンス《キリスト昇架》1610-11年、板に油彩、460cm×340cm、アントウェルペン、ノートルダム大聖堂

図17 ● ルーベンス《キリスト降架》1611-14年、板に油彩、421cm×311 cm、アントウェルペン、ノートルダム大聖堂

図18 ● ベラスケス《ラス・メニーナス》1656年、カンヴァスに油彩、318cm×276cm、マドリード、プラド美術館

鏡。そこには娘を見るフェリペ5世と妃が描かれています。つまり、彼らは、この絵を見る私たちと同じ場所に立っていることになります。すると、我々がまるで絵の中の空間に入り込んでいるかのように感じられます。こういった絵に引き込むための錯覚の効果は、イリュージョニズムと呼ばれます。

バロックは建築の分野にも及びました。フランスの絶対君主ルイ14世は、バロック様式のヴェルサイユ宮殿を造営します。同じように、権威を象徴するような豪壮華麗な宮殿となっています。

逸脱としてのバロックとロココ

先述のように、ルネサンス以降、古典主義がヨーロッパの主流の概念として定着します（**西洋絵画の見方4**）。しかし、バロックは、この古典主義に忠実に則るものではありませんでした。

そもそも「バロック」とは「歪んだ真珠」という意味で、本来のものからの逸脱というニュアンスをもつ言葉です。その本来のものが古典主義であり、そこからの逸脱がバロックと見なされていたということです。古典主義は「安定」と「静謐」を特徴とします。しかしながら、バロックの「劇的」で「動的」な表現はそういった傾向から明らかに外れています。

この時期、バロックの落とし子として、同じように逸脱する潮流が他にもありました。「逸脱」をより洗練して優雅で軽快なものにした、ロココです。18世紀のフランス宮廷、特にルイ15世の時代に発展した様式です。

宮廷女子たちの趣味

バロックの延長としてロココが生まれてきたわけですが、一方で、バロックの反動として生まれてきたと見ることもできます。バロックは権力と結びついた宣伝のための絵画です。ゆえに、誤解を恐れずに言えば、バロックには男くさく、豪華絢爛、そして押しつけがましくて少しうるさいところがあります。しかし、やはり誤解を恐れずに言えばですが、ロココは女らしく、軽快で繊細、優雅な様式として登場してきます。実際、ロココの中心になったのは、フランスのルイ15世の公妾であったポンパドゥールです。彼女はヨーロッパの女性たちのファッションリーダーのような存在で、サロンを開いて芸術家や文筆家を集め、ロココが隆盛する場をつくりました。

西洋絵画の見方 ⑤ 直線と曲線

ここで、男性と女性について考えるとともに、それらが美術にどのように反映されるのかを見てみましょう。美術においては、一般に直線は男性的な印象を与え、曲線は女性的な印象を与えるとされます。これは男女の体のラインを想像すれば納得できるのではないでしょ

うか。現在でもロココ調の家具と言えば、たいてい曲線が強調されたものになっています。

・直線――一般に男性的な印象を与える
・曲線――一般に女性的な印象を与える

そもそも、ロココという言葉は、装飾品として用いられた貝殻状の人造石である「ロカイユ」に由来しています。女性が好みそうな、ちっちゃくてキラキラした貝殻です。やはりロココ様式の家具と言えば、ロカイユに装飾されたものが多いでしょう。また、ロココで多用された色はピンクです。それも、特にポンパドゥールが好んだポンパドゥールピンクは、白を少し混ぜた柔らかいピンクです。そして、ロココで主題とされたのは女性たちの話題でした。これはいつの時代も変わらないのかもしれません。それは「恋話（バナ）」です。

それでは、宮廷女子たちの芸術を見ていきましょう。ロココの画家は3人しかいませんので覚えておくとよいかもしれません。ヴァトー、ブーシェ、そしてフラゴナールです。

ヴァトーとブーシェ

ロココを代表する作品に、ヴァトーの『シテール島の巡礼』があります（図19）。諸説ありますが、これは男女八組の恋人が、いわば「合コン」の後に、縁結びの聖地であるシテール

図19 ● ヴァトー《シテール島の巡礼》1717年、カンヴァスに油彩、129cm×194cm、パリ、ルーヴル美術館

図20 ● ブーシェ《エウロペの略奪》1732-34年、カンヴァスに油彩、230.8cm×273.5cm、ロンドン、ウォレス・コレクション